



畑作・野菜・花き生産情報 第2号

令和5年5月19日
青森県「攻めの農林水産業」推進本部

- ◎ 小麦の生育が大幅に早まっています。赤かび病の適期防除に努めよう！
- ◎ 大豆の排水対策・土壌酸度矯正・砕土を徹底しよう！
- ◎ 野菜の生育は順調に推移しています。適正な栽培管理を徹底しよう！
- ◎ 施設内の温度変化が激しい時期です。きめ細かな栽培管理により高品質な花きの生産に努めよう！
- ◎ ほ場周辺の雑草は病害虫の発生源となるので、繁茂させないように除草・防草に努めよう！

畑作物

1 小麦

(1) 生育状況（5月10日現在）

ア 草丈は、平年を上回っている。

イ 茎数は、ネバリゴシでは地点によるばらつきが大きく、キタカミコムギは大幅に少なくなっている。

ウ 生育ステージは、ネバリゴシ、キタカミコムギともに1週間程度早まっており、生育の早い地点では、5月8日から出穂期に到達している。

表-1 小麦の生育状況（5月10日現在）

場所	年次	ネバリゴシ						キタカミコムギ					
		草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	止葉抽出期 (月日)	止葉抽出期 SPAD502	出穂期 (月日)	開花期 (月日)	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	止葉抽出期 (月日)	止葉抽出期 SPAD502	出穂期 (月日)	開花期 (月日)
農林総合 研究所 (黒石市)	本年	53.7	396	5/3	/	5/13	未達	56.4	386	5/5	/	未達	未達
	平年差・比	113%	64%	(9日早)		(7日早)	-	108%	67%	(8日早)		-	-
	平年	47.4	623	5/12		5/20	5/27	52.1	580	5/13		5/22	5/29
	前年	49.0	599	5/10		5/16	5/22	52.8	508	5/11		5/18	5/23
野菜 研究所 (六戸町)	本年	74.4	686	5/1	/	5/10	未達	/					
	平年差・比	123%	78%	(10日早)		(10日早)	-						
	平年	60.4	875	5/11		5/20	5/29						
	前年	60.3	724	5/10		5/18	5/26						
つがる市 (木造)	本年	69.0	709	5/2	37.8	5/10	未達	84.1	440	4/30	43.6	5/8	未達
	平年差・比	125%	117%	(7日早)	-	(9日早)	-	141%	83%	(11日早)	-	(13日早)	-
	平年	55.1	608	5/9	-	5/19	5/28	59.6	533	5/11	-	5/21	5/30
	前年	51.6	452	5/4	40.5	5/18	5/27	47.8	359	5/10	42.1	5/20	5/26
十和田市 (相坂)	本年	63.3	1008	5/4	43.2	5/16	未達	/					
	平年差・比	131%	120%	(5日早)	-	(6日早)	-						
	平年	48.2	841	5/9	-	5/22	5/29						
	前年	54.6	919	5/8	44.3	5/17	5/24						

- 注) ①農林総合研究所、野菜研究所が作況試験ほ、つがる市、十和田市が生育観測ほの調査成績
 ②平年値は、農林総合研究所の「ネバリゴシ」、「キタカミコムギ」が過去17か年、野菜研究所の「ネバリゴシ」が過去14か年(24年産(出芽不良)を除く)、つがる市の「ネバリゴシ」が過去20か年、十和田市の「ネバリゴシ」が過去21か年、つがる市の「キタカミコムギ」が過去27か年の平均値
 ③止葉抽出期は5月10日時点、出穂期は5月16日時点

(2) 今後の留意点

- ア うどんこ病の防除は、病斑が止葉直下葉に発生した直後に薬剤散布を行うと効果的である。ただし、アミスター20フロアブルは、出穂後に使用すると、赤かび病のカビ毒汚染低減効果が劣る事例があるため、別の薬剤を使用する。
- イ 赤かび病の防除は、開花始めから開花期に1回目の防除を行い、その7日後に2回目の防除を行う。2回目の防除後、天候不順が続きまん延のおそれがある場合は追加防除を行う。
なお、農作物検査法の検査規格では、赤かび粒混入限度は0.0%である。
- ウ 湿害防止のため、排水溝や明きよの点検補修を行い、ほ場の排水に努める。
- エ 本年は生育が早まっているので、今後の登熟状況に注意し、適期収穫に備える。

2 大 豆

(1) ほ場の準備

ア 排水対策

湿害による出芽不良やその後の生育不良を防ぐため、排水対策はしっかり行う。ほ場の周辺及び内部に明きよ（深さ30cm程度の排水溝）を掘り、排水路に確実につなぐ。

排水不良のほ場では、弾丸暗きよや心土破碎などの排水対策も組み合わせる。

イ 土づくり

大豆の生育に適した土壌酸度はpH6.0～6.5である。酸性の強いほ場や水田転換畑では生育不良や根粒菌の活性低下を招くため、苦土石灰などで酸度矯正する。

有機物や土づくり肥料の施用により地力の維持・向上を図る。

ウ 耕起・砕土

出芽・苗立ちの確保や除草剤の効果を高めるため、耕起・砕土は丁寧に行い、砕土率（土塊の大きさ2cm以下）70%以上を確保する。

エ 施肥

施肥方法は、原則として全量基肥とし、施肥量は表-2を参考とする。

初めて作付けする水田転換畑では、は種直前に根粒菌の種子粉衣で着生を促す。

表-2 施肥基準（10a当たり成分量、kg）

品種	窒素	りん酸	加里
中晩生種	2～3	10～15	8～10

中生種：「おおすず」、晩生種：「オクシロメ」

(2) 種子の準備

ア は種時期

「おおすず」は5月中旬から下旬がは種適期である。

イ は種量

作付面積の拡大や、は種時の天候不順などにより、適期よりも遅くは種せざるを得ない場合は、うね幅を慣行の半分程度に狭めた晩播狭畦栽培とする。遅くなるに従って、は種量を多くして栽植本数を確保する。

ウ 種子消毒

紫斑病、虫害対策として種子消毒を行う。

表－3 「おおすず」のは種時期及びは種量

は種期		うね幅 (cm)	栽植本数 (本/10a)	は種量 (kg/10a)
5月中旬～下旬		60～80	20,000程度	7～8
5月下旬～6月上旬		60～80	20,000～30,000	7～12
晩播 狭畦	6月中旬～下旬	30～40	25,000	9～10
	7月上旬～中旬	30～40	25,000～30,000	9～12
	7月第4半旬～第5半旬	30	30,000	10～12

(3) は種方法

は種はロータリシーダなどで行い、は種深度は3～4cmとする。

は種後の降雨により出芽が不安定になるほ場では、湿害回避に有効な「正転ロータリによる耕うん同時畝立て播種で大豆の出芽が安定する」(平成22年度指導参考資料)又は「耕うん同時畝立て播種技術」(農研機構中央農業研究センター北陸研究センター)を参考に、は種方法を検討する。

(4) 雑草防除

土壌処理剤の散布は、は種後速やかに行う。

例年、ツユクサの発生が多いほ場は、令和4年度指導参考資料「大豆栽培における難防除雑草ツユクサ多発圃場の防除対策」を参考に、防除方法を検討する。

野菜

1 にんにく

(1) 生育状況

ア りん片分化期は、平年より8～12日早く到達した。生育は、平年並か平年を上回っており、順調である。

イ さび病、春腐病の発生が見られる。

表－4 にんにくの生育状況(5月10日現在)

調査地点	年次	植付期 (月日)	りん片 分化期 (月日)	5月10日			収穫期 (月日)	備考
				草丈 (cm)	葉数 (枚)	茎径 (mm)		
野菜研究所 (六戸町)	本年 (平年差・比)	9/30 (2日早)	4/8 (11日早)	100.2 (119%)	13.0 (118%)	22.5 (112%)		種子:福地ホワイト (13～14g) 透明マルチ
	平年	10/2	4/19	84.3	11.0	20.1	6/30	
	前年	9/30	4/19	98.0	12.6	22.7	6/28	
藤崎町 福島	本年 (平年差・比)	9/20 (±0日)	4/13 (12日早)	59.2 (99%)	7.7 (101%)	20.5 (110%)		種子:白玉王 (12g前後) 黒マルチ
	平年	9/20	4/25	59.5	7.6	18.6	6/27	
	前年	9/15	4/24	58.2	7.2	19.2	6/27	
七戸町 榎林	本年 (平年差・比)	9/29 (3日早)	4/15 (8日早)	66.2 (105%)	7.6 (102%)	18.1 (99%)		種子:白玉王 (14g) グリーンマルチ
	平年	10/2	4/23	63.0	7.4	18.3	6/27	
	前年	9/21	4/16	73.8	8.2	22.5	6/21	
田子町 日ノ沢	本年 (平年差・比)	10/2 (4日早)	4/10 (12日早)	77.1 (119%)	9.0 (115%)	20.0 (111%)		種子:白玉王 (10～12g) グリーンマルチ
	平年	10/6	4/22	64.7	7.8	18.0	6/27	
	前年	9/28	4/19	75.5	8.7	19.8	6/22	

- 注) ①平年：野菜研究所は平成22年～令和4年の12か年の平均値
藤崎町は令和2年～令和4年の3か年の平均値（担当農家、マルチの有無が変更となったため参考値）
七戸町は平成8年～令和4年（平成24年を除く）の26か年の平均値
田子町は平成14年～令和4年（平成21年、令和2年を除く）の19か年の平均値
- ②種子：野菜研究所は福地ホワイト（13～14g）、藤崎町は白玉王（12g前後）、
七戸町は白玉王（14g）、田子町は白玉王（10～12g）
- ③葉数：野菜研究所は抽出葉数、藤崎町、七戸町、田子町は生葉数

（2）今後の農作業の留意点

ア 今後の見通し

地域によっては、生育が平年を上回っていることに加え、向こう1か月の天候の見通し（5月11日気象庁発表）では、気温が高く、降水量・日照時間がほぼ平年並の予報であることから、収穫期は平年より早まると見込まれる。

イ 病害虫の適期防除

（ア）春腐病は、降雨や濃霧が続くと急増するので、3～4日曇雨天が続くと予想される場合には、降雨前の予防散布を徹底する。また、腐敗が進行している株は伝染源となるので見つけ次第抜き取る。

（イ）さび病が発生しているほ場では、効果持続期間が長い薬剤を散布し、病勢の進展を抑える。

（ウ）葉枯病、黄斑病、白斑葉枯病、ネギコガなどは、ほ場を見回り、早期発見・早期防除を徹底する。

ウ とうの摘み取り

抽だいが始まったら、随時とうを摘み取り、球の肥大を促す。とうの摘み取りは、珠芽が葉鞘から完全に抜け出してから行う。

2 ながいも

（1）今後の農作業の留意点

ア 普通栽培の植付適期は5月中旬～6月上旬なので、計画的に植付ける。

ただし、切いもの場合は、地温が低いと種いもの腐敗を招きやすいため、地温15℃以上を確保できる5月下旬～6月上旬に植付ける。

イ 覆土は、植付け後速やかに6cm程度の厚さで行う。2～3週間後に、さらに6cm程度培土し、種いもから地表までの深さを12cm程度確保する。

ウ 頂芽付小型1年子の早植え栽培（4月下旬～5月上旬植付け）の基肥は、萌芽期（萌芽が50%の頃）に、窒素成分で10a当たり6～10kg施用する。

3 春夏にんじん

（1）生育状況

ア 生育は平年を上回っており、順調である。

イ 病害虫の発生は見られない。

表－５ 春夏にんじんの生育状況（５月10日現在）

調査地点	年次	は種期 (月日)	5月10日					備 考
			葉長 (cm)	葉数 (枚)	根長 (cm)	根径 (mm)	根重 (g)	
六戸町 上吉田	本年 (<small>平年差・比</small>)	3/15 (2日遅)	19.0 (92%)	5.6 (108%)	17.2 (115%)	14.7 (141%)	9.7 (194%)	透明ポリトンネル
	平年	3/13	20.6	5.2	15.0	10.4	5.0	
	前年	3/11	25.8	6.0	16.5	14.0	8.7	

注) ①平年：平成25年～令和4年の10か年の平均値

②品種：彩誉7

③前年の調査地点：六戸町下吉田

(2) 今後の農作業の留意点

ア 間引き

トンネル栽培では本葉5～6枚時まで、べたがけ栽培では本葉3～4枚時までに1本立てとし、次の①～⑤の株は間引きする。

- ① 葉色が濃すぎるもの
- ② 葉が粗剛で刻みの大きいもの
- ③ 葉数が多すぎるもの
- ④ 生育が極端に良すぎるもの、または悪いもの
- ⑤ 病害虫の被害があるもの

イ 温度管理

(ア) トンネル栽培では、高温障害を防ぐため、生育ステージに合わせた温度管理を徹底する。

- ① 4葉期まで：30℃以下
- ② 5葉期～：25℃以下
- ③ 5月下旬：順化（つま、裾は開けたまま）
- ④ 6月上旬：除覆（平均気温15℃以上）

(イ) べたがけ栽培では、本葉5～6枚時を目安に除覆する。ただし、この時期に低温が予想される場合は、本葉7枚頃まで除覆せず保温に努める。

ウ 追肥

(ア) トンネル栽培では、本葉5～6枚時に、窒素、加里とも成分で10a当たり3kg程度の追肥を行う。

(イ) べたがけ栽培では、本葉3～4枚時に、窒素、加里とも成分で10a当たり3kg程度を追肥し、本葉5～6枚時にも同様に行う。

4 春だいこん

(1) 生育状況

ア 生育は、平年を上回っており、順調である。

イ 病害虫の発生は見られない。

表－6 春だいこんの生育状況（5月10日現在）

調査地点	年次	は種期 (月日)	5月10日			備 考
			葉長 (cm)	葉数 (枚)	根重 (g)	
おいらせ町 内山平 (旧百石町)	本年 (<small>平年差・比</small>)	3/16 (3日早)	36.0 (101%)	20.3 (94%)	396.0 (139%)	透明ポリマルチ＋ 透明ポリトンネル
	平年	3/19	35.6	21.5	285.0	
	前年	3/18	36.1	22.5	400.3	

注) ①平年：平成25年～令和4年の過去10か年の平均値

②品種：春の星

(2) 今後の農作業の留意点

ア 病虫害防除

例年、キスジノミハムシの発生が見られるほ場では、トンネル除去後、早めに防除する。また、ナモグリバエ、コナガなどの早期発見・早期防除に努める。

イ 収穫

根部の肥大状況を確認しながら適期に収穫する。

5 ばれいしょ

(1) 生育状況

ア マルチ栽培の植付期は平年より8日早く、萌芽期は平年より10日早かった。

イ 草丈、茎数は平年を下回っているが生育は順調である。

表－7 ばれいしょの生育状況（5月10日現在）

調査地点	年次	植付期 (月日)	萌芽期 (月日)	5月10日	
				草丈 (cm)	茎数 (本)
三沢市 三沢	本年 (<small>平年差・比</small>)	3/25 (8日早)	4/24 (10日早)	11.3 (91%)	2.1 (88%)
	平年	4/2	5/4	12.4	2.4
	前年	4/3	5/3	13.2	2.4

注) ①平年：平成25年～令和4年の10か年の平均値

②品種：メイクイン

(2) 今後の農作業の留意点

ア 培土と追肥

1回目の中耕・培土は、草丈10cm頃を目安に行う。2回目は、着らい期（40～50%の株がつぼみを着ける時期）に窒素成分で10a当たり4～5kgを追肥してから行う。

イ 病虫害防除

6月中旬以降になると病虫害が発生しやすくなるので、早期発見・早期防除に努める。

なお、疫病の防除は予防散布を徹底するとともに、同一系統の薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤をローテーション散布する。

6 メロン

(1) 生育状況等

トンネル栽培（4月下旬～5月上旬定植）では、定植作業が平年より6日早く行われた。定植後の生育は順調である。

(2) 今後の農作業の留意点

ア 温度管理

トンネル内の温度は15～30℃を目標に換気し、雌花の確保と生育促進に努める。

イ かん水

乾燥による生育抑制が懸念されるほ場では、かん水に努める。

ウ 整枝・着果

(ア) 子づる2本仕立てとし、うねと直角方向に誘引する。着果節位は子づるの10～15節とし、子づる1本当たり3～4果連続で着果させる。子づるは22～25節前後で摘心する。

(イ) 孫づる(わき芽)は、着果節位までは早めに全てを除去し、着果節位の孫づるは、開花期前後に1～2葉残して摘心する。着果節位より上の孫づるは、順調な生育状態では全て除去するが、草勢が弱い場合は1葉を残して摘心する。つる先の2～3本は、生育調節のために残しておく。

エ 交配

着果節の開花7日前までにミツバチの巣箱を畑に設置し、蜂の訪花活動を促す。

蜂の動きが活発でないときは人工交配を行う。人工交配は、雄花の花粉を直接または筆で雌花の柱頭に軽く付ける。また、天候不順の場合はホルモン処理を併用する。

オ 摘果

果実が鶏卵大(着果後7～10日)の頃に、形状の良いものを子づる1本当たり2果残す。

花 き

1 夏秋ギク

(1) 生育状況

生育はおおむね順調で、病害虫の発生は見られない。

表－8 定植期等

場 所	年次	品種名	定植期 (月日)	仕立て 本 数	栽植本数 (本/a)	備考
新 郷 村	本年 (平年)	精の一世	4月17日 (2日早)	1本	4,646	挿し苗
	平年	精の一世	4月19日	1本	3,795	直挿し・挿し苗
	前年	精の一世	4月21日	1本	4,766	挿し苗
五所川原市	本年 (平年)	岩の白扇	4月6日 (9日早)	2本	4,400	挿し苗
	平年	岩の白扇	4月15日	2本	4,400	挿し苗
	前年	岩の白扇	4月22日	2本	4,400	挿し苗

注) 平年は新郷村が平成26年～令和4年の9か年、五所川原市が平成30年～令和4年の5か年の平均値だが、新郷村は令和2年、令和3年に担当農家に変更となったため、参考値となる。

(2) 今後の作業

ア 温度管理

花芽分化の安定のため、温度は15℃以上、30℃以下を目標に管理する。

イ かん水

草丈を伸ばすため、定植後、1.5か月くらいは十分にかん水する。

ウ 芽かき・つぼみかき

発らいと前後してわき芽が伸び始め、大きなつぼみの周りにも小さなつぼみができるので、切り花品質向上のため早めに除去する。

エ 病害虫防除

白さび病やアブラムシ類、アザミウマ類、ハモグリバエ類等が多発する時期なので、早期発見・早期防除に努める。

2 秋ギク

(1) 今後の作業

ア 苗の養成

採穂に当たっては、病害虫に侵されておらず、太さが揃い充実したものを選択し、展開葉5枚程度、長さ5～6cm程度に調整し、さし芽を行う。

イ ほ場の準備

- (ア) 10月出荷の作型は、6月上旬～下旬に定植できるように、計画的に作業を進める。
- (イ) 土壌pHの矯正及び基肥の施用は定植2週間前までに行い、土に十分なじませておく。
- (ウ) 水分不足は生育の遅れを招くので、あらかじめ十分にかん水しておく。

ウ 定植

- (ア) 苗は、1～2cm程度発根したものを定植する。
- (イ) 定植後、軽やかにかん水して活着を促進する。

エ 定植後の温度管理

- (ア) 日中は25℃以上にならないように管理する。
- (イ) ほ場周辺の雑草は病害虫の発生源となるので、繁茂させないように除草・防草に努める。

3 トルコギキョウ

(1) 生育状況

春定植栽培の生育はおおむね順調で、病害虫の発生は見られない。

表－9 定植期等

場 所	年次	品種名	は種期 (月日)	定植期 (月日)	栽植本数 (本/a)
青 森 市	本年	ひこ星	1月31日	4月6日	4,000
	前年	北斗星	1月20日	4月13日	3,333
黒 石 市	本年	ボンボヤージュスイートピンク	購入苗	5月5日	2,470
	前年	セブリティホワイ	購入苗	4月27日	2,780

注) ①青森市の平年値：令和元年から品種が変更されたため、平年値なし

②黒石市：本年から担当農家に変更されたため、平年値なし

(2) 今後の作業

ア 定植

(ア) 老化苗は生育が劣るので、展開葉4枚までの苗を定植する。

(イ) 定植の際は深植えとせず、株元を強く押さえないようにする。定植後は、苗と土をなじませる程度に軽くかん水する。

(ウ) 9～10月出荷の作型は6月下旬頃までに定植する。

イ かん水

活着までは乾燥させないように適宜かん水する。

ウ 温度管理

日中の温度が25℃以上になると生育の停滞やロゼットの要因となるので、換気等による温度管理を徹底する。

エ 追肥

生育の状況を見ながら、発らい期頃までに液肥で行う。

オ 病害虫防除

病害虫の早期発見・早期防除に努める。

畑作・野菜・花き生産情報第3号は令和5年6月20日発行の予定です。

◎『日本一健康な土づくり運動』展開中 ～元気な作物は健康な土が育みます～

土壌診断に基づいた適正施肥や土壌改良は、施肥コストの低減にもつながります。

緑肥を活用し、作物の生育に好適な土壌環境づくりを心がけましょう！

効率よく堆肥を使い、堆肥の肥料成分を考慮した化学肥料の低減に努めましょう！

◎令和5年度青森県農薬危害防止運動を実施します。(6月1日～8月31日)

1 農薬を使用する際は、必ず最新の登録内容を確認し、適正に使用しましょう。

○農林水産省「農薬情報」

https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/

○農林水産省「農薬登録情報提供システム」

<https://pesticide.maff.go.jp/>

2 飛散防止に努め、住宅地等の近隣で使用する際は、事前に周囲に知らせましょう。

3 クロルピクリン剤など土壌くん蒸剤を使用する際は、必ず厚さ0.03mm以上又は難透過性の被覆資材で被覆しましょう。

4 市販の除草剤には「農薬でない除草剤」や「非農耕地専用除草剤」があり、いずれも農作物等の栽培管理に使用できないので、注意しましょう。

5 農薬は使い切りを徹底し、河川等には絶対に捨ててはいけません。

◎食中毒を防ぐため、生産段階から「野菜の衛生管理」に努めましょう。

1 栽培に使用する水の衛生管理や水質の確保に努めましょう。

2 家畜ふん堆肥は、水分調整や定期的な切り返しを行い、十分発酵させましょう。

家畜ふん中の菌の死滅には、55℃以上の温度が3日以上続いている状態が必要です。

堆肥の製造工程では、この温度条件を確認しましょう。

3 家畜ふん堆肥を野菜栽培に使用する際は、製造工程や熟成度を確認しましょう。確認できない場合には、堆肥施用から収穫までの期間を、収穫部位が土壌から離れた野菜は2か月、土壌に近い野菜は4か月空けましょう。

4 農機具や収穫容器等は清潔な状態を保ち、汚水の流入や野生動物の侵入防止等、栽培環境の整備にも努めましょう。

※ 野菜の衛生管理指針、家畜ふん堆肥の生産・利用の注意点はこちら

→https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/nourin/sanzen/yasai_eiseikanri.html



◎備えあれば、憂いなし！ 農業保険を活用しましょう！

自然災害や価格下落など、農業経営を取り巻く様々なリスクに備えるため、自分の経営にあった農業保険（国などが掛金の一部を補助する公的保険制度）を活用しましょう。

1 自然災害リスクをカバーしたい方

農業共済（農作物共済・畑作物共済・園芸施設共済）は、全ての農業者を対象に、米、麦、畑作物、農業用ハウスなどが自然災害によって受ける損失を補償します。

※ナラシ対策や野菜価格安定制度等を利用することもできます。

2 様々なリスクをカバーしたい方

収入保険は、青色申告を行っている農業者を対象に、自然災害や価格低下だけではなく、農業者の経営努力では避けられない収入減少を広く補償します。

<野菜価格安定制度を利用している野菜生産者の皆様へ>

現在、当分の間の特例として、初めて収入保険に加入される方は、収入保険と野菜価格安定制度を同時利用（2年間）することができます。

※ 詳しくは、お近くの農業共済組合までお問い合わせください。

◎春の農作業安全運動を展開中です（4月1日～5月31日）

春の農作業が本格化する4～5月は、一年の中でも農作業事故が多くなる時期です。農作業安全のポイントを意識しながら、「焦らず、急がず、慎重に。」を合言葉に、地域ぐるみで声を掛け合い、安全第一で農作業事故をなくしましょう。

<農作業安全のポイント>

- 1 慣れた作業でも油断せず、安全を確認して、作業を行いましょう。
- 2 必ず、作業の合間に十分な休憩を取りましょう。
- 3 自分は「大丈夫」と過信せず、無理のない作業を行いましょう。
- 4 一人での作業は避け、やむを得ず一人で行う場合は、家族に作業場所と帰宅時間を伝え、携帯電話を持ちましょう。
- 5 家族や周りの人など、地域全体で注意を呼び掛け合いましょう。
- 6 万一の事故に備えて、労災保険や農機具共済などの保険に加入しましょう。

連絡先	農産園芸課 稲作・畑作振興グループ
県庁内線	5073
直通	017-734-9480

	野菜・花き振興グループ
県庁内線	5076
直通	017-734-9485
